

II. 主 題 (大腸癌の低侵襲治療)

1 当院における腹腔鏡下括約筋間切除術の成績

西村 淳・川原聖佳子・河内 保之
牧野 成人・北見 智恵・角田 知行
大浜 隆弘・新国 恵也

厚生連長岡中央総合病院
消化器病センター外科

【背景と目的】下部直腸癌に対する括約筋間切除術 (ISR) は、症例を適切に選択すれば、直腸切断術に代わる有望な選択肢とみなされている。また近年、直腸癌手術は腹腔鏡下手術の特長を最も発揮できる領域であると認識されてきた。当院でも、2010年から腹腔鏡下括約筋間切除術 (Lap-ISR) を導入した。今回、その短・中期成績を評価する。

【対象と方法】cMP以下、cNOを対象とした。

① Transanal division of the distal rectum. ② Removal of part or all of the internal anal sphincter. ③ Handsewn coloanal anastomosis. という条件を満たす6例につき検討した。5ポートで腹腔鏡操作を行った。ポート創とは別に、右下腹部に diverting stoma を全例に設置した。手技をビデオで供覧する。

【結果】手術時間312分、出血量39.5ml。肛門縁腫瘍間距離35mm、pDM12.5mm。全例pRMOであった。合併症は、1例に縫合不全が生じ、保存的に治癒。1例に吻合部狭窄をきたし、一時的な人工肛門閉鎖不能。術後在院日数12.5日。再発例は無い。(数値は全て中央値)

【考察】腹腔鏡下括約筋間切除術は、開腹よりも優れた視野で手術を行うことができる。真に低侵襲な成績を得るためには、適切な症例選択とともに、腹腔鏡手術操作に習熟する必要がある。

2 大腸癌に対する Reduced port surgery の検討

岩谷 昭・山崎 俊幸・登内 晶子
眞部 祥一・堅田 朋大・須藤 翔
石野信一郎・横山 直行・桑原 史郎
大谷 哲也・片柳 憲雄

新潟市民病院消化器外科

右側結腸癌に対する Reduced port surgery (RPS) の短期成績を、同時期に施行した Conventional laparoscopic surgery (CLS) と比較検討した。2010年1月から2012年11月までに施行した、右側結腸癌に対する腹腔鏡下大腸切除症例を対象とした。CLS群102例、RPS群27例。両群で年齢、性別、局在、BMI、開腹歴の有無に差はなかった。CLS群の手術時206分、出血量5ml、術後入院期間7日。RPS群の手術時間196分、出血量5ml、術後入院期間6日と両群に有意差はなかった。CLS群とRPS群に合併症の頻度で差はなかった。整容性ではRPSが優れ、特に2mmの創は術後3カ月目にはほとんど分からない程度に改善した。11mmのポート創は臍部創と同等かそれ以上に痛がることも多かったが、5mmと2mmの創の痛みは軽度だった。右側結腸癌に対するRPSはCLSに近い視野・操作性を保つことも可能で、短期成績に差はなかった。RPSはCLSと比べ整容性、術後疼痛の面で優れていると思われる。

3 大腸がんに対する単孔式腹腔鏡下大腸切除術

桑原 明史・新田 正和・島田 能史
田邊 匡・武者 信行・坪野 俊広
酒井 靖夫

済生会新潟第二病院外科

大腸がんに対する低侵襲手術は、従来の開腹手術から腹腔鏡下結腸切除術が広まりつつあり、さらに直腸がんといったより高度な手術へも適応されつつある。一方で、傷自体をさらに縮小させるといった点からの低侵襲性手術として Reduced Port Surgery が提唱され、臍部の切開のみでおこなう単孔式腹腔鏡下大腸切除術が注目されている。